

日本歯科保存学会2008年度 春季学術大会(第128回)報告

医歯学系・准教授 吉羽 邦彦
(う蝕学分野)

2008年6月5日(木)、6日(金)の両日、朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター(新潟市)において特定非営利活動法人日本歯科保存学会2008年度春季学術大会(第128回)が本学う蝕分野主管(興地隆史大会長)にて開催されました。本学会は、保存修復、歯内療法、歯周療法の三領域を幅広く包含する専門学会としての立場から、「歯を保存するための学問と医療」に終始取り組んでおり、春秋年2回の学術大会が開催されています。

今回の学術大会では、特別講演1題、シンポジウム2題のほか、認定研修会、外国招聘者を囲むセミナー、ランチョン・セミナー、一般口演・ポスター発表・臨床セッションなどの多くの研究発表が行われました。

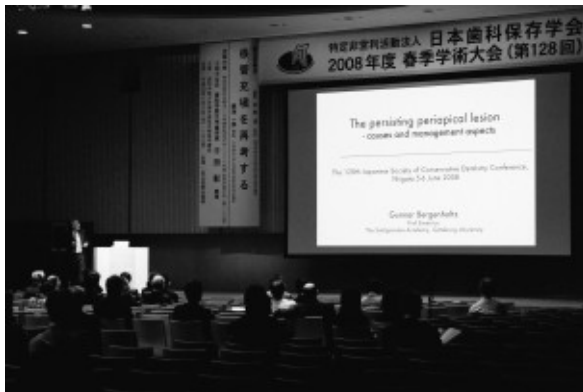
初日の特別講演には、歯内療法領域で指導的な立場を担ってきたイエテボリ大学・Gunnar Bergenholtz 名誉教授をお招きし、「The Persisting Lesion after Endodontic Therapy – Causes and Management Aspects」と題するご講演をいただきました(写真)。歯内療法後に持続する病変、いわゆる難治性根尖性歯周炎の原因と対処法について基礎・

臨床の両側面から解説いただきました。その後、Bergenholtz 先生には若手会員を対象とした「外国招聘者を囲むセミナー」にもご登壇いただき、「Management of Pulpal Exposures by Caries – Non-invasive or Invasive Treatment?」と題してご講演いただきました。

第2日目、本学口腔生命福祉学科・福島正義教授をコーディネーターとしてシンポジウム1「口腔バイオフィルムの感染制御戦略を考える」が開催され、本学からは、う蝕学分野・竹中彰治助教がシンポジストとして講演されました。また神奈川県歯科大学・石井信之教授をコーディネーターとして開催されたシンポジウム2「先端的バイオロジーと歯科保存臨床の連携—歯科保存領域の自然免疫と臨床応用への可能性—」では、本学口腔生命福祉学科・山崎和久教授がシンポジストとして登壇されました。いずれのシンポジウムも修復・歯内・歯周三領域間、あるいは基礎と臨床の連携につながる最前線的话题を提供していただき、活発な討論がなされました。

お陰様で、約1,100名の方々のご参加を得て、無事盛会裡に終了することができ、準備委員長として安堵しているところです。

最後になりましたが、本学術大会開催にあたりご後援・ご助成いただきました新潟大学歯学部、新潟大学歯学部同窓会、新潟県歯科医師会、新潟市歯科医師会をはじめ関係各位に改めまして御礼申し上げます。また大会運営にご協力いただきました医歯学総合病院研修医ならびに歯周診断・再建学分野の皆様がこの場をお借りして感謝申し上げます。



86回 IADR に参加して

大学院生 奥村 暢 旦
(生体歯科補綴学分野)

みなさんはトロントという街を御存知でしょうか？

名前は聞いた事があるが、具体的にどんな所かイメージがわからないという方が大半だと思います。実際私も準備を始めるまでは、カナダの都市くらいの漠然とした知識しかありませんでした。ところが、いろいろと調べてみると、都市圏の人口約510万人で北米第5の大都市、五大湖のひとつオンタリオ湖に面している、アメリカの4大スポーツのうち3つ (MLB・NBA・NHL) のチームに加え、ベッカムが移籍したことで話題のMLSのチームもある、かつては世界一の高さを誇った電波塔 CNタワー (553m)がある、ナイアガラの滝が近い、など次々と出発が待ち遠しくなるような話題が出てきました。

そんな期待を抱きつつ降り立った、トロント・ピアソン国際空港から市街地へと向かうタクシーから見たトロントの夜景は美しく、前述のCNタワーがライトアップされているのを見たときに、それまでの準備が大変でしたので、余計に強くついに来たと実感させられました。街は市庁舎やトロント大学・ロイヤルオンタリオ博物館などの趣ある建物と、高層ビルとがうまく融合し、非常に洗練された都市という印象を受けました。見るも

の全てが新鮮で、夜8時を過ぎても夕方のように明るいトロントの街にすっかり魅了されてしまいました。

と、ここまで読まれて、「観光に行ったのか?」と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、タイトルの通り観光ではなく、学会での発表が今回の目的ですので、そろそろ本題に入りたいと思います。今回私が参加したのは、IADR (International Association for Dental Research) という世界各地に会員数約11,000名を擁する、名実共に歯科界最大の学会であり、86回の今年は口演・ポスターを含め約3,600の発表がありました。内容も非常に多岐に渡り、基礎から臨床まで、考えうる全ての分野があるといっても過言ではないでしょう。

その中で私は Finite Element Analysis of Implant-embedded Maxilla Model from CT Data というタイトルでポスター発表させていただきました。有限要素法という力学解析を用いて、CT撮影により得られたデータをもとに、実際の上顎骨にインプラントを植立したシミュレーションモデルを構築し、解析したというものです。有限要素法を用いたインプラントに関する研究は日本をはじめ台湾・中国などアジアの研究者を中心にいくつか発表がありました。発表者の中にはエンジニアの方もいらっしゃった



め、こういった方とお話し、普段気付かない点に対し、御意見をいただけるのもこうした大きな国際学会の重要な部分だと改めて感じました。英語での質疑応答は薄氷を踏む思いでしたが、事前に様々な方に御指導いただきシュミレーションした成果で無事やり遂げることができました。その日の夜、トロントの街で飲んだビールが格別だったことは御想像いただけるものと思います。この経験を幸運にも帰国後すぐに生かす機会に恵まれ、新潟歯学会にてIADR前よりもさらに充実した内容を参加された皆さんにお見せできたのではないかと思います。

発表以外の時間は、膨大な量の中から厳選した興味深い口演を聞き、ポスターを見て、そして夜

はそれらをもとに、同行させていただいた先生方とトロントの食を堪能しながらディスカッションし、あっという間に5日間は過ぎていきました。

私は幸運なことに、昨年に続き2回もこのIADRにて発表させていただくことができました。毎回新しい発見があり、刺激があり、帰国した自分を一回りも二回りも成長させてもらった気がします。それも全て、御指導いただいた先生方、快く送り出してくださった医局の先生方、そして御支援いただいた全ての方々のおかげです。この場をお借りして御礼申し上げます。私のような貴重な経験を若い研究者のみなさんが得ることができるような環境が、この先もずっと続くことを願い、この項を結ばせていただきます。

